麗　澤　教　育

第23号
平成29年（2017）４月

特集　麗澤型PBL学習

『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。年１回発行しています。

麗澤教育　第二十三号〈目次〉

フォト・アルバム　創立者廣池千九郎生誕150年記念事業……6

〈特別寄稿〉

創立者廣池千九郎生誕150年を振り返って……中山　理　8

Linking Past to Present
「人口」研究から見る過去・現在、そして未来へ……黒須　里美　15
——廣池千九郎生誕150年記念事業報告

〈特集〉

麗澤型PBL学習……23

地域と連携する麗澤型PBLへの全学的取り組み……籠　義樹　24

ミクロネシアPBL型体験学習……成瀬　猛　31
PBL型学習と出会って（浪野愛子）　ミクロネシア研修の経験を通して（岡田実夏）　ミクロネシア研修　PBL型学習を経験して（久徳謙介）　PBL型学習を通じて学んだこと（秋本麗汀）

カンボジア、0から始める国際協力……内尾　太一　47
Plas+とは……（村瀬朱里）　カンボジアについて（大塚桃香）　カンボジアの小学校について（市川舞夏）　出前授業について（森田遼太郎）　飛び出し坊やについて（大久保佳織）　宮城県南三陸町での研修（安部和佳奈・谷内うらら）　順天高校訪問について（小田嶋優花・小川龍星）　おわりに（宮崎杏）

学生の主体性が生んだ「ネパールPBL型学習」……梅田　徹　59

フォト・アルバム　この1年……68

観光は現場から——フィールドでの学び……山川　和彦　70
枝幸町の魅力に惹かれて（香川唯）　石垣島での1か月——計り知れない感動と学び（高萩玲奈）

ヒューマンライブラリー（HL）プロジェクトについて……山下　美樹　78
——誰にでも語れるストーリーがある
HL体験記　HLの「司書」を担当するということ（大竹祥汰）
HLは体験するもの：直接話を聴いて分かること（藤井サムエル）
社会的なカテゴリー化は偏見を生む（二見恭平）
産学連携アクティブ・ラーニング型
研究プロジェクトを通じて……圓丸　哲麻　90
ゼミで学んだこと（荻野由加）　圓丸ゼミナールを通じて学んだこと（小屋裕太）　「産学連携アクティブ・ラーニング」を通して学んだこと（園部勝己）

◇麗陵祭と黒須ゼミ
3年間の活動から得たもの……渡部　梨沙　102
黒須ゼミに感謝……藤原ゆめか　106
時を越え、縦横につながる黒須ゼミ……櫛山　万葉　109

◇ホームカミングデイ
自分の原点を確認し、麗大の現在を知る旅……中道　嘉彦　112

◇卒業生の今
世界を股に掛けた仕事へ……吉田　龍弘　117

◇コラム
私にとって武術太極拳とは……荒谷　友碩　122
私と麗澤大学の4年間……小早川恭子　127

＊寄稿していただいた在学生の学年は、平成二十八年度です。

創立者 廣池千九郎生誕150年記念事業

麗澤大学は 2016 年を「創立者廣池千九郎生誕150 年記念年」とし、2015 年にプレイベントを、2016 年には生誕150 年記念事業を展開してきました。記念行事の一部を紹介します。
詳細は、廣池千九郎生誕150年記念サイトをご覧ください。（http://www.hiroike-chikuro.jp/150th/）

ベトナム初の道徳研究センターが設立（2015.12.10）

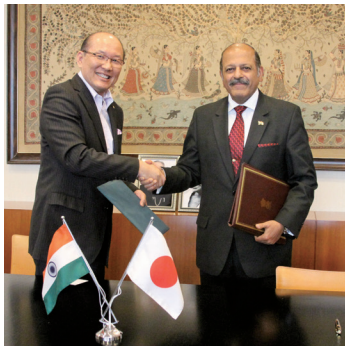
ベトナムの経営者向けにセミナーを開催（2015.12.10）

日本人口学会第 68 回大会･公開シンポジウム（2016.6.11）

ノーベル物理学賞受賞者・梶田隆章教授特別講演会
「『ニュートリノ』の小さい質量の発見」(2016.9.20)

日本とミクロネシア連邦を含む太平洋の「共生社会」についてのシンポジウム「太平洋がみんなのキャンパス～若者がつくる 21 世紀の共生社会～」（2016.11.3）

『廣池千九郎 - 道徳科学とは何ぞや』
出版記念シンポジウム (2016.11.30)



インド文化関係評議会 (ICCR) との
連携協定を締結　　（2016.5.20）

インド・タゴール国際大学で
国際会議「タゴールと日本及び日本の諸側面とその文化」」を開催（2016.8.26-27）

マレーシア・サラワク大学で道徳と経済に関するシンポジウムを実施（2016.12.5）

国際人口学会セミナー（2016.12.9-10）

〈特別寄稿〉

創立者廣池千九郎生誕150年を振り返って

麗澤大学学長　中山　理

創立者廣池千九郎生誕150年を迎えた平成28年度も、3月をもって終わりを迎えつつある。そこでこの1年間に本学が何を目指し、何を行ってきたのかを振り返ってみたい。

まず、この記念年を迎えるに当たり、本学が取ろうとした基本的なスタンスは、「伝統」と「革新」であった。その場合の「伝統」とは、グスタフ・マーラー（Gustav Mahler）がいみじくも述べたように、「伝統とは火を守る（伝える）ことであり、灰を崇拝することではない」という時の「火」を意味する。その第一歩として私たちが取り組んだのは、麗澤教育の原点である廣池博士の遺志に立ち戻りながらも、同時に現代において社会的責任を果たす高等教育機関として、それを学修・教育・研究の分野でいかに展開していくかを考えることだった。道徳・倫理の科学的研究とそれを基盤としての啓蒙活動にその生涯を捧げた廣池博士は、たえずグローバルな視点を念頭に置き、世界の人々の安心、平和、幸福の実現を目的とする諸活動を計画していた。そこで本学では、道徳と倫理に関する学修・教育、研究のグローバルな展開を「創立者廣池千九郎生誕150年記念年」のテーマに掲げることとした。

本学では、本事業をより広く知っていただき、廣池千九郎の建学の精神を身近に感じられるよう、平成28年度の本イヴェント実施に先立ち、前年の27年度から、プレ・イヴェントを実施することにした。

平成27年度に実施したプレ・イヴェント

(1)　海外高等教育機関等での講演・シンポジウム

・平成27年2月　シンガポールの本学提携校ナンヤンポリテクニックでの学長特別講演“What Is the “Secret” of the Longevity of Japanese Enterprises?——Discerning the Contribution of Morality to Business——”。

・7月　ドイツの本学提携校イェーナ大学での学長講演“Tradition is to Pass on the Flame, Not Worship the Ash——from a Viewpoint of Japanese Traditional Culture, Business and Morality——”、奥野保明客員教授によるドイツ語での講演「ドイツ再統一前後の日本との交流」。

フランクフルトの五つ星ホテル、シュタイゲンベルガー・フランクフルター・ホーフ内のレストラン「ホーフ・ガルテン」で、「麗澤会欧州支部」の発足を記念するとともに、「ドイツへの留学生送り出し1000名記念」を祝し、本学でドイツ語を学んだ卒業生の親睦を図るため、ドイツ大同窓会を開催。

・10月　アメリカの本学提携校セント・マーチンズ大学と共同シンポジウム（テーマ：Higher Education for the Sustainable Future: Perspectives across the Pacific）を開催。

学長講演“Morality, Sustainability and Higher Education——from the Viewpoint of Cultural and Business Studies”、犬飼孝夫教授講演“A Global Community and a Global Ethic—— A Case Study: Reitaku University”。

・12月　本学提携校のベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学に道徳研究センターが設立され、開所式に参加。その後、同大学と共催で「ベトナムと日本の文化——融合と発展」というテーマの国際シンポジウムを開催。学長

ドイツで大同窓会を開催（平成27年７月）

基調講演「科学、宗教、道徳――比較文明論的考察――」、堀内一史教授の研究発表「社会貢献する信仰集団：日本における信仰に基づくソーシャル・キャピタル（ＳＣ）」、犬飼孝夫教授の研究発表「地球倫理としての利他主義：諸宗教に通底するもの」。

・2月　フィリピンの本学提携校パーペチュアル・ヘルプ大学で学長講演
“Japanese Culture, Business and Morality”。

(2)　海外高等教育機関等との共同研究

・アメリカ・ミズーリ大学「人格・市民性センター」（Center for Character & Citizenship）と本学の「道徳科学教育センター」が人格教育に関する共同研究を継続して行う。
研究テーマ：道徳教育のインパクトを測定するツールの開発。

・イギリス・バーミンガム大学「人格・徳ジュビリー・センター」（The Jubilee Centre for Character and Virtues）と人格教育に関する共同研究を行う。

(3)　国内での研修会・講演会等

・8月　平成27年度柏市教職員研修会（道徳）を開催。「道徳の本質と実践～よりよい道徳教育と道徳授業をめざして～」、江島顕一助教が講演「よりよい道徳教育をめざして」、柏市立藤心小学校広中忠昭校長が講演「道徳の教科化に向けた授業改善」。
第3回高校教員のための道徳教育講座を開催。江島顕一助教が講演「よりよい道徳教育をめざして」、千葉県教育庁西周信幸指導主事ならびに千葉県立松戸高等学校の道徳教育推進教師である足達正明教諭が「千葉県における道徳教育の現状と課題」を、茨城県教育庁の渡邉英一指導主事が「茨城県における道徳教育の現状と課題」を報告。最後に東京情報大学総合情報学部の原田恵理子准教授が「心理教育的アプローチを活かしたモラル教育」と題して、インターネット上の問題行動やいじめの実態などから道徳教育の必要性を解説。

平成28年度に実施した本イヴェント

本年度は、プレ・イヴェントをさらに継続発展する路線で多様性と重層性を追求した。

(1)　海外の学会誌に、廣池千九郎の教育思想、麗澤大学における道徳教育の教授法およびインパクト測定法を紹介する。学長と堀内教授がゲスト編集者となり、アメリカの人格教育に関する学術雑誌に、同テーマの特集を組む計画を発足させた。

(2)　国内と海外で記念シンポジウムを開催し、専門の学問領域での研究成果の発表、および廣池千九郎の道徳思想等の紹介があった。

・6月　日本人口学会・麗澤大学共催で、廣池千九郎生誕１５０年記念事業として公開シンポジウム「人口政策の成り立ちを考える～Linking Past to Present～」を開催。本学の代表は黒須里美言語教育研究科長。
「廣池千九郎生誕１５０年記念経済・経営シンポジウム」①（福岡会場）で学長基調講演「企

業永続の条件――21世紀に生かす廣池千九郎の道経一体の思想」。

・8月　インドのタゴール国際大学と共催でシンポジウムを開催した。1916年のタゴール国際大学創立者ラビンドラナート・タゴール初訪日100周年および麗澤大学創立者廣池千九郎生誕150年を記念したシンポジウムであるが、この模様はインド東部の英字新聞『The Telegraph』（2016年8月22日）でも紹介された。

　記念式典では学長が英語で基調講演。「日本の文化・文学・社会・歴史」をテーマとする国際学会では、竹内啓二教授が「タゴールと廣池千九郎の教育観」、学長が「日本式庭園とその自然観」、犬飼孝夫教授が「日本の道徳の起源：聖徳太子の17条憲法」をテーマに、それぞれ英語で発表を行った。国際会議の『タゴールと日本および日本の諸側面とその文化』と題した予稿集には、モディ首相や西ベンガル州知事からの御祝のメッセージも寄せられた。この会議で発表された論文も書籍化される予定である。

・9月　「生と死を考える会全国協議会」全国大会（テーマ「響き合う命――支え合う〈生と死〉」）を本学で開催。

　麗澤オープンカレッジ（ROCK）開校10周年と重ねて、麗澤中学・高等学校と共にノーベル物理学賞受賞者・梶田隆章氏による「『ニュートリノ』の小さい質量の発見」と題しての特別講演会を開催。

・11月　地球システム・倫理学会 第12回学術大会（テーマ“A World of Sustainability～とこわかの思想～”）を本学で開催。

　「廣池千九郎生誕150年記念経済・経営シンポジウム」②（東京会場）で学長基調講演「企業永続の条件――21世紀に生かす廣池千九郎の道経一体の思想」。

・12月　マレーシアの本学提携校サラワク大学で「モラロジーと経済と企業倫理」（総合テーマ“Moralogy, Economics and Business Ethics”）の国際会議・UNIMAS-REITAKU Conference 2016が開催され、学長の英語による基調講演“Economy, Morality and Sustainability―from the Viewpoint of Cultural and Business Studies

マレーシアのサラワク大学での学長による基調講演（平成28年12月）

―”（「経済、道徳、持続可能性」）、小野宏哉副学長の英語による本学の研究・教育活動の紹介の後、堀内一史教授は「近世日本における『労働の精神』の萌芽：『労働』と『人格形成』に関する鈴木正三の思想」、中野千秋経済研究科長は「日本企業における倫理確立に向けての取り組みと管理者の倫理観――1994年、2004年、2014年の調査結果の比較をふまえて」、下田健人経済学部長は、「戦後日本の経済成長における中小企業の役割とモラロジーの理念」をテーマとして、それぞれ英語で研究発表を行った。

　国際人口学会 歴史人口学セミナーを開催（テーマ“Linking Past to Present: Long-term Perspectives on Micro-Level Demographic Processes”）。国内のみならず世界各国から著名な歴史人口学者が参加。本学の代表は黒須里美言語教育研究科長。

・平成29年3月　「廣池千九郎生誕150年記念経

済・経営シンポジウム」③（大阪会場）で学長基調講演「企業永続の条件――21世紀に生かす廣池千九郎の道経一体の思想」。

(3) 本学提携校のベトナム国家大学における道徳研究センターの活動を支援するとともに、昨年（平成27年）に開催した国際会議での基調講演や主だった研究発表を収載した論文集『日本：多様な文化が融合する国』を刊行。日越対訳で英文のサマリーも掲載されており、ベトナム人学生が日本語や日本文化を学ぶための副読本として活用される予定。

(4) 学生主体の環太平洋地域をフィールドとした「課題解決型学習」（ＰＢＬ）シンポジウム「太平洋がみんなのキャンパス！～若者がつくる21世紀の共生社会～」を大学祭期間中に開催した。ミクロネシアでの環境教育プロジェクトに指導的立場で関わってきた成瀬猛教授による基調講演後、ミクロネシア短大を含む４大学の学生が発表。

(5) 廣池千九郎生誕１５０年記念スカラシップ入試を実施。

(6) 全学年で「道徳科学」を順次に学べる新カリキュラムを整備。

(7) 経済学部で「道経一体コース」を開始。

(8) 各学会等の開催を支援。

(9) 図書館において廣池千九郎の人と業績を紹介する展示を企画・実施。

大学が関係する行事としては、現時点（平成29年3月10日）でほぼ終了したことになる。これまで日本国内のみならず世界８か国で種々の学術・教育に関するイヴェントを開催したが、そのすべてが成功裏に終わり、各界で大きな反響があったのは、廣池幹堂理事長のリーダーシップのもと、このプロジェクトに協力を惜しまなかった関係諸氏のお蔭である。この場をお借りし、本学学長として心より感謝の意を表したい。

Linking Past to Present
「人口」研究から見る過去・現在、そして未来へ

～廣池千九郎生誕１５０年記念事業報告～

言語教育研究科長・教授　黒須里美

はじめに

日本は、今、世界の人口研究者から注目を浴びている。先進諸国のみならず、世界の多くの国々で、少子化、高齢化が加速する中、その先陣を切って「超」少子高齢社会を築いているからである。寿命はどこまで伸びるのか、人口減少はどこまで進むのか。なぜ、今、このような人口問題を抱えることになったのか。今後の日本はどうなるのか。私たちの「未来」を考えるためには、「現在」を理解しなくてはならない。そして現在を理解するためには、「過去」に学ばなくてはならない。それがまさに“Linking Past to Present”（過去と現在をつなぎ、そして未来へ）というテーマである。

このテーマを掲げて、本年度二つの学術的会議を麗澤大学で開催した。その一つが、日本人口学会第68回大会（２０１６年６月11・12日）、もう一つが国際人口セミナー（２０１６年12月９・10日）である。この４日間に凝縮された会議の中での学術的・国際的研究の成果発表と交流、そしてその準備と運営のために繰り広げられた一連の作業は、まさに過去と現在をつなぎ、国内外の研究者をつなぎ、そして教職員と学生の世代と部署を超えたつながりを築く機会となった。本稿では、これらの会議の背景となる

人口学と麗澤大学のつながり、それぞれの会議の内容、さらにその舞台裏を振り返る。

人口学と麗澤大学

そもそも、なぜ麗澤大学で人口学なのか。世界に注目される重要な研究分野でありながら、「人口学」を看板に掲げて研究・教育を行っている機関は日本では少ない。人口学という人の生死と移動を中心とした人口行動に着目する研究は、社会科学の分野の中でも一番学際的なコラボレーションが進んでいるとも言える。私自身は麗澤大学を卒業して、アメリカ・シアトルのUniversity of Washingtonの社会学研究科に入って初めて、この分野に出会った。そして偶然にも日本の人口学を代表し、この世代では稀有な国際的活躍をされていたお二人の先生と出会った。

一人は、日本の人口学の第一人者である河野稠果先生、もう一人は、日本の歴史人口学の創始者であり、文化勲章を受章された速水融先生である。お二人とも１９９０年代から２０００年初めにかけて麗澤大学経済学部（当時は国際経済学部）に在籍され、現在は名誉教授である。

河野先生は１９９７年の日本人口学会大会を麗澤大学でホストされた。当時、私はまだ京都の国際日本文化研究センター（日文研）で助手をしていたので、お手伝いはできず、会員の一人として大学キャンパス内の研修寮に泊まって参加した。学生寮のような雰囲気の中で夜も楽しく著名な先生や若手の研究者と交流したことを、今でもはっきりと覚えている。その後、河野先生から厚生労働省科学研究費補助金（政策科学推進事業）の「出生率回復の条件に関する人口学的研究」にお誘いいただき、欧米の第一線で活躍されていた人口学者にインタビュー調査を行うという大役を任せられた。

速水先生との出会いは京都の日文研であった。当時先生は、京都と柏を往復されながら今や研究史に残る大プロジェクト「ユーラシアプロジェクト」（文部省科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」）に取り組まれ、私はその幹事を仰せつかった。１９９５年からの10年間、速水先生は、麗澤大学東京研究センター（新宿）を本拠地に研究活動を展開された。その後、ご退職に伴い、先生が半世紀近く収集されてきた歴史人口学関係の膨大な資料を麗澤大学に寄贈された。徳川時代の１５００カ村近い宗門改帳を中心とするその資料は「麗澤アーカイブズ」として、現在、大学図書館に収められ、私が代表を務める「人口・家族史研究プロジェクト」で、データ構築とそれを利用した研究が進んでいる。２０１６年からは文部科学省の私立大学研究拠点形成事業に採択された。「歴史人口学の世界的研究拠点を目指す」というたいそうな目標を掲げてしまったが、今回開催の学会とセミナーは、偶然にもその重要なステップの一つとなった。そして振り返ってみれば、お二人の先生方との共同研究から、このような会議に必要な、学術的・国際的な人的ネットワークと運営の仕方を授けられていたと気づかされた。

日本人口学会第68回大会

日本人口学会第68回大会は２０１６年６月11日、12日の２日間、Linking Past to Presentをメインテーマに掲げて行われた。会場となった大学校舎「あすなろ」には、２日間、日本全国から集まった会員に加えて、アメリカ、香港、台湾、韓国、中国からの研究者や非会員も含めた２０２名の参加があり、人口問題を巡る学際的・国際的議論で大いに賑わった。２日間の大会で、合計70本の研究報告があった。毎年議論が賑わう少子化、晩婚化のテーマはもちろん、大会テーマにちなんだ英語セッション“Marriage and Family Building in Historical and Contemporary East Asia”、学会として初めて扱う「セクシュアル・マイノリティに関する人口学的研究」も含め、人口開発問題のゆくえ、出生率の地域格差、結婚、未婚者の現在と将来などテーマは多岐にわたった。

６月11日の午後には、日本人口学会・麗澤大学共

日本人口学会の開催を支えたスタッフ

催、廣池千九郎生誕150年記念事業として公開シンポジウム「人口政策の成り立ちを考える～Linking Past to Present～」を開催した（以下、開催報告より）。シンポジウムでは、中山理学長から「日本人口学会と麗澤大学との共催で開催する記念事業としてふさわしく、過去と未来がリンクするという副題に合わせ、創立者の想いが現在も受け継がれている麗澤大学で開催できることを非常に嬉しく思う」とご挨拶いただいた（詳しくは「学長室ウェブサイト」参照）。

シンポジウムでは座長の原俊彦氏（札幌市立大学）が「様々な人口現象が起こる中、人口学会として問題意識を持ってこのシンポジウムを行い、人類の将来について、また人口と社会について考えていくべきである」と今回のシンポジウムの意図を述べた。報告者の岡山大学・沢山美果子氏は「江戸時代の妊娠・出産管理政策からみる、いのちの序列化」について報告を行った。続いて龍谷大学・大塩まゆみ氏は「ユニバーサルなフランスの家族政策の起源」について19世紀フランスに遡ることを議論された。名古屋市立大学・藤田菜々子氏からは人口減少危機に直面した戦間期スウェーデンの「消費の社会化」という人口政策・社会政策・経済政策の一体化案についての報告があった。

最後に大阪市立大学・杉田菜穂氏は「戦間期の日本における優生－優境主義」に着目し、「質のより良い社会のために必要なものは遺伝と環境の改善によってもたらされる」という考え方があったことを発表した。終わりに企画者のひとりである明治大学・加藤彰彦氏が、「人口政策には〝量〟の問題と〝質〟の問題がある中、今回は人口の〝質〟についての報告が多くなされた。それは報告者が女性であり、実際に子どもを産む当事者視点が大きく影響しているのではないか。男性目線ではどうしても出生率1.8を目指さなくてはと〝量〟について考え数字を追いかけがちだが、今回の発表で女性目線の報告をたくさん聞くことができて有意義であった」と締めた。

日本全国から大学教員、研究者、政策関連事業者、院生・学生を含む140名が集い、報告とパネルディスカッションに熱心に参加された、3時間を超えるシンポジウムとなった。

国際人口セミナー

2016年12月9、10日には、キャンパスプラザにおいて、IUSSP（国際人口学会）セミナー"Linking Past to Present: Long-Term Perspectives on Micro-Level Demographic Processes"を開催した。副題を日本語にすると、「ミクロレベルデータから迫る長期的人口変動」というところである。10カ国の専門家が集い、各国で構築の進む大規模なミクロデータを用いて、過去と現代をつなぐ、これまでにない長期的な視点と方法から、結婚、出生、家族、そして社会的・地理的移動行動を含む重要な人口問題に迫った。

このセミナーは国際人口学会歴史人口学パネルと「廣池千九郎生誕150年記念事業」共催、日本人

熱心に耳を傾けメモをとる国際人口セミナーの参加者

口学会「協賛」として行われた。組織者であるDiego Farinas氏（Spanish National Research Council）, Martin Dribe氏（Lund University, Sweden）と私の3名が公募し選んだ18本の論文は、ミクロレベルデータを用いた長期的視野からの人口変動（結婚、出生、多世代同居、社会的・地理的移動行動）に関する最新の研究成果であった。オブザーバーも含めて35名ほどの参加者で、朝8時半から午後の5時半まで、2日間、集中して活発な議論が展開された。10カ国から集まった研究者は、世界の歴史人口学研究拠点のリーダーたちと次世代を担う若手研究者たちであった。各国で構築の進む大規模なミクロデータを用いて、過去と現代をつなぐ、これまでにない長期的な視点と方法から、現代の重要な人口問題に迫る成果を得、今後の歴史人口学の新たな研究の視野とさらなる学際的アプローチの可能性が開かれたという手応えを感じた、実りあるセミナーとなった。

学会大会と国際セミナーの舞台裏

戦後から続く日本人口学会や、世界的ネットワークを持つ国際人口学会（IUSSP）のセミナーをホストするということは大変な栄誉である。しかし、それにはローカルオーガナイザーである私自身だけでなく、場とマンパワーと資金が欠かせない。麗澤の美しいキャンパスと施設、教職員、院・学部生の協力、そして麗澤大学からのサポート、という3つが奇跡的に揃ってこそ可能になったイベントであることは言うまでもない。

創立者生誕150年記念年という年回りに二つの学術的集会を開催するチャンスがめぐってきたこと。またこの年が私立大学研究拠点形成事業の最中であったことから資金面での基盤があっただけでなく、運営面で様々な部局からの支援を受けることができた。学内の教育研究支援グループは1年も前から準備に関わっていただき、ビザの手配や当日の英語対応までもしてくださった。情報教育センターには、日本人口学会で今回初めてとなったWEB化への完全移行（Paper free）で、大会中会場のどこからでもWi-Fiでプログラムと要旨が確認できるようにしていただいた。また国際セミナーでも2日間のために会場にWi-Fiを特設していただいた。6月の設営、多言語による案内、受付、セッションタイムキーパーなどにはゼミ生を中心とした学部生と言語教育研究科の大学院生、そしてモラロジー専攻塾生が積極的に関わってくれた。また名札準備から経理まで人口・家族史研究プロジェクトのスタッフにも協力いただいた。

さらに思いがけないたくさんの「助っ人」の登場があった。ここでは3名を挙げたい。ひとりは公開シンポジウムの準備を一手に引き受け、これを機に人口学会会員にもなって親身に応援してくださった麗澤大学講師冬月律氏である。彼の学会運営のご経験と柔和な人柄にどれだけ助けられたか分からない。もうひとりは人口学会を「麗澤らしく」という企画の段階から関わり、Farm to Tableという懇親

会の演出をしてくださった、地元柏で「わが家のやおやさん 風の色」を営む今村直美氏である。会場の「はなみずき」に柏市内のレストランシェフを招き、彼女自身が育てたオーガニック野菜を中心とした地域の食材をふんだんに使った料理を、まるで野外パーティーのように大胆に並べるという趣向が凝らされた。麗澤のホスピタリティーを大いに印象付ける懇親会となった。

最後のひとりは、学会とセミナーの統一テーマの趣旨をくみ取り、それを大胆に、そしてシンボリックに表現したポスターデザインを手掛けてくださった、本学職員企画広報課の野木清司氏である。野木氏の斬新なデザインは人目を惹く広報効果はもちろんのこと、学会やセミナーの重要性を内外に示し、ホスト側メンバーの意思統一とやる気を鼓舞し、そして何よりそのポスターが飾られた空間をより国際的・学際的に盛り立ててくれた。そんな空間を共有した6月の学会と12月のセミナーの4日間は、参加者にも、運営側にも満足度の高い印象的なものとなった。

おわりに

今後も日本の人口問題からは目が離せない。このままいくと、現在の学部生たちが今の定義の「高齢者」に仲間入りする頃には高齢者割合は40％となる。超少子高齢社会で「高齢者」となる学生たちはどう老いていくのか。今回の会議で展開した長期的・学際的視野からの研究と、それに基づく教育が今後ますます必要になってくるだろう。河野先生と速水先生の伝統を受け継ぎつつ、麗澤大学でこそ可能な多角的かつ倫理的な視点から家族と人口の研究と教育が展開できるのではないか。

最後に、ここで挙げきれなかったたくさんのご協力と応援に感謝するとともに、栄誉ある学会とセミナーの開催を記念行事と位置付け支援してくださった麗澤大学に心から感謝したい。